

## 伏見宮博恭王の開戦論

日米開戦前夜の1941年10月初めの昭和天皇の様子が『昭和天皇独自録』の中からの引用で次のように描かれています。

「十月の初伏見宮 [孫崎注：1932年から41年4月永野修身に譲るまでの間、海軍軍令部長] が来られて意見を述べられた。即近衛、及川、永野、豊田 [貞次郎・外相]、杉山、東条の六人を並べて戦争可否論をさせ、もし和戦両論が半々であったらば、戦争論に決定してくれとの事であった。私は之には大蔵大臣 [孫崎注：小倉正恒。このポストの前は住友本社総理事] を参加せしむべきだと云って不賛成を表明した、高松宮も砲術学校に居た為、若い者にたき付けられ戦争論者の一人であった。近衛、及川、豊田の三人は平和論、永野、杉山、東条の三人は戦争論、皇族その他も戦争論多く、平和論は少くて苦しかった。東久邇宮、梨本宮、賀陽宮は平和論だった、表面には出さなかった。(略) 確乎たる信念と勇気を欠いた近衛は一面九月六日の御前会議の決定に縛られてこの間の処理に非常に苦しみ、遂に辞表を提出して総辞職となった。」

『日米開戦の正体』 p123

以下、『日米開戦の正体』にて出てくる伏見宮博恭王の言動の様相です。

(1941年10月28日海軍省内での論議にて)

「(嶋田)海相：米国は何時立って先制の利を占むるやも知れず。そうなれば日本の作戦は根本的に破れ、勝味はなくなる。この際海軍大臣一人が戦争に反対した為に戦機を失したとなっては申し訳ない。

(中略)

嶋田海相は、海相就任時は不戦派でした。しかし、伏見宮から「速やかに海戦せざれば戦機を逸す」との言葉があり、開戦回避は不可能と判断したとされています。」 (p132)

「(1941年)十一月四日、軍事参議官会議

天皇親臨の下に陸海軍合同の軍事参議官会議を開き、十二月初頭の武力発動を目途に戦争準備を促進するの已むなき旨を議決奉答した。

出席者は、閑院宮、伏見宮両元帥、陸海軍大臣及び統帥部長、... (以下略)」 (p135)